隻眼の人

飯尾憲士

隻眼の人

飯尾憲士

文藝春秋刊

隻眼(せきがん)の人　奥付
昭和五十九年八月二〇日　第一刷

定　価　一、三〇〇円
著　者　飯尾憲士(いいおけんし)
装幀者　田村義也
発行者　西永達夫
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三　郵便番号一〇二
電話東京（〇三）二六五局一二一一
印刷　精興社　製本　加藤製本
万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

© Kenshi Iio 1984　Printed in Japan

目次〈隻眼の人〉

隻眼の人 5
軍歌 47
炎 89
屋根裏部屋のある家 169
박쥐（蝙蝠） 219
崔乙順の上申書 265

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

純文学
創作集

隻眼の人

飯尾憲士著

隻眼の人

I

戦後、私の胸の一隅にずっとひっかかっていることが、二つあった。一つは、私が陸軍予科士官学校の生徒だった頃の区隊長枝叢嘉太（えだむらしたた）に会うこと、もう一つは、父の死を韓国の肉親たちに知らせることだった。

私は父の肉親たちに会ったことがなかった。彼等が六・二五動乱（朝鮮戦争）で無事でいるか、北と南に離ればなれになっているかも、全くわからなかった。

私の歳が、昭和二十七年五十四歳で病死した父の歳に近づくにつれて、焦りを覚えはじめてきた。手許に、褪色した父の謄本があった。大正五年十九歳で単身日本内地に渡ってきた父が、昭和十八年二十六年ぶりに故国の京城に帰った際持ってきたものだった。朝鮮総督府発行のその謄本を手づるにして、新聞社に勤めている友人の部下のソウル特派員が、内務部治安本部の外事課

員と手分けして探しはじめた。

二ヵ月たっても、みつかったという報せは来なかった。たとえみつからなくても、私は父の位牌を持って渡韓しようと心に決めていた。ソウル市庁に日本語のわかる吏員がいるにちがいない。謄本に記載されている「京城府北米倉町八十九番地」は現在のどこに該当するか訊き出し、その場所に佇って、バッグの中の位牌に、父の母国にやっと来たことを報告しようと思っていた。

しかし、それも杞憂に終った。みつかったという電話が友人からかかってきた。私は日本を発った。ソウル郊外の従弟の家に、多くの肉親たちが集まって私を待っていた。

2

枝叢嘉太に会ってみたいという念いに急かれはじめたのは、帰国してからである。私は陸軍予科士官学校生徒の頃、いくつかの反抗的な行動をとったが、彼から罵倒された憶えが無い。職業軍人である弱冠二十七歳の青年大尉が、私の父の国籍を知った上で、私に対して配慮でもしたというのだろうかと、長い間私の胸の中にひっかかっていた。

軍隊に於て反抗や批判は、抗命罪となる。上官の命令は、天皇の命令と同じである。まして、将校を養成する陸軍予科士官学校の軍規は厳しい。規律に耐えられなくて、夏期帰省中に自殺した生徒もいる。反抗して営倉にはいった生徒もいる。彼の配慮が無くては、私は陸士生活を無事に送ることができなかったのではないだろうか。

彼に会ってはっきり確かめてみたいと思いながら、それを果たさないで日を送ってきたのは、陸士時代を思い出したくない気持ちがあったからだった。私は、同期生との文通も一切しなかっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。

昭和十九年大分県下の田舎町の中学校を卒業した私は、埼玉県朝霞の陸軍予科士官学校に入学し、翌年三月埼玉県豊岡の本科陸軍航空士官学校に進んだ。

敗戦後、熊本の旧制高等学校に入学しなおしたが、寮の部屋で夜中何度かうなされた。私ははね起きる。ぐっしょりと寝汗をかいている。二人部屋である。同室者の寝息を窺う。割れたままの硝子窓から月光が忍び込んでいる部屋の中を、虚ろな眼で見廻す。漆喰の壁は落書きだらけである。先住者が次々と書きつけて去ってゆくのである。横文字も混じっている。鴨居からマントが二つ垂れ下がり、本が開かれっぱなしの座机の上に汚れた白線帽が抛り出されている。蓬髪の同室者の机の周りには書物が積まれているが、読むふうはない。月光が埃を薄く浮かび上がらせている書物の山にぼんやり眼を遣っていると、陸士時代の自分の姿が浮かび上がってくるのである。私は身を退く気持ちで、その自分をみつめる。

教練用下装衣袴に帯剣、巻脚絆をつけた私は、鉄帽の顎紐を喉元で固く結んで、九九式短小銃を右脇に抱え込み、左肘で地面を掻きながら匍匐前進している。眼がギラギラと光っている。地形地物を利用しての戦闘各個教練である。雑草の葉先が、汗にまみれた顔を刺す。予科士官学校百万坪の敷地の大半を占める、広大な練兵場であった。

教練は厳しかったが、別に辛いとは思わなかった。中学生の頃も、教練は毎日のようにあった。皮靴など手にはいらなくなっていたので、地下足袋を穿きゲートルを巻いた私たちは、旧式の三八式歩兵銃に着剣し、岡から吹きおろしてくる風で舞い上がる校庭の砂塵に眼をつむりながら、校庭のはずれに立てられてある数体の藁人形に向かって突撃した。叩き上げの中尉の、八字髭を生やした老配属将校は、サーベルを抜いて私たちの背後から声を上げた。教練で肉体を酷使する

ことには、馴れていた。

午前中のやたらに詰め込むだけの教授部課業の印象が、重く残っているというわけでもなかった。三日ごとに勤務交替する正取締生徒の引率で、教程（教科書）、手簿（ノート）、筆筒（筆箱）などを入れた書籍嚢を左小腋に、学科課堂で穿き替えるための上靴嚢（スリッパ袋）を提げて講堂に向かう。数学、物理、化学、支那語、電気工学、機械工学、法制学等々が詰め込まれるが、完全に理解はできない。空襲警報が夜間頻繁に鳴り渡り、叩き起こされて壕に退避する。教練の疲れもあり、受講中うとうとして、そんな心構えでこの戦局を背負う将校になれると思っているのか、と教官の叱責を受けるのは誰しも同じだった。

起床喇叭と同時に端を藁布団の下に巻き込んである毛布の中からもがき出、襦袢袴下のまま寝台戦友と共同で毛布を畳んで、平常装用軍衣袴を着服するや否や、先を争って洗面所に走り込み、点呼のため赤房のついた懸章を肩にかけた週番士官が早々と出てきている舎前に、上靴を営内靴に穿き替えて息せき切って並ぶまでの十五分間の慌ただしさなど、馴れれば大して苦痛ではなかった。

点呼後、遥拝所で各個に軍人勅諭を奉読。朝食ののち自習、そして舎前で週番士官の服装検査を受けて、隊伍を整え教授部課業へ、といった午前中の日課が終ると、午後は教練などの生徒隊課業、剣術や体操などの自由錬磨、洗濯、靴磨きなどの内務、夕食、軍歌演習、号令調整、自習、そして夜の点呼。分刻みの一日も、時間に追われていれば、就寝となる。軍隊生活の味気なさへの不平など無かった。

何にも辛い思いなど無かったのに、あの頃のことを思い出すと、なぜこうまでいやな気持ちに捉われてしまうのか。

混血児であるという卑屈感だって、全くといってよいほど無かった。父が朝鮮人であるということを知ったのは、中学四年生のときである。戸籍謄本を見て、私が母の私生児として届け出されていることに不審を抱いたのがきっかけだった。日本内地に渡ってきて洋服仕立人になっていた父が、母と結婚したのは大正十年であるが、婚姻届けを役場に出していない。母も私たち三人の子供に隠していたのだが、告げられなければわからないほど、父の容貌や言葉は日本人とそっくりであった。

私は中学五年生のとき、海軍兵学校を受験した。私の故郷は「軍神広瀬中佐」の生誕地大分県竹田市（当時は町）である。小学生の頃から、私は海兵に進もうと思っていた。中学三年生のとき、真珠湾奇襲の戦果と、五隻の小さい特殊潜航艇に乗って湾内に侵入して戦死し、新聞が〝軍神〟と大見出しを付けた九人の乗組員の話を教師から聞いて、私たちは興奮した。海兵志望は一層固まった。受験場は、県庁所在地の大分市にある海兵合格率県下一位を誇る有名中学校の講堂だった。試験は三日間にわたって行われた。毎日の学科で振り落としてゆくので、最終日には受験席は空席だらけになっていた。私の中学からは四人だけが残って、四日目の口頭試問ののち、入校後の制服、帽、靴の寸法を予め計られた。毎日宿に帰って、各自の答案を検討したが、四人とも似通っていた。十一月三日の明治節が合格発表日だが、電報を受け取ったのは三人だけで、私には音沙汰が無かった。

私の父が朝鮮人であるということは、町役場の戸籍係りや、何人かの在町朝鮮人の動向に気を配っていた警察官は当然知っていたわけだし、それに又他家の竈の灰さえお互い知っているといわれるほどの小さい町であったから、海兵不合格という一件が無くても一部の同級生にはすでにわかっていたはずだが、私に向かって同級生たちがそのことを一言も口にしなかったのはなぜな

のだろうかと思うことがある。町なかを清流が貫流していて、ひぐらしをききながら釣り人がいつも何人か糸を流しているといったのどかな盆地町であったが、朝鮮人蔑視の風潮は充分に浸透していた。小学校から下校すじの川岸に、朝鮮人が経営している売春屋があり、色もののチョゴリ、チマ姿の朝鮮女が橋下の石畳みで洗濯物を叩いていた。悪童たちは橋の手すりから卑猥な言葉を投げ下ろすのが常だったが、彼女たちは黙って洗濯をつづけていた。私の母が永年臥せっていて、父が洋服仕立ての合い間に少しガニ股で買物籠を提げて夕食の材料を買いに行ったり、月謝を納入日からいつも遅れて持ってゆく私の家の経済状態を同級生たちは知っていたから、私の素性を口にするのを遠慮したのであろうか。

彼等のそのような慮(おもんぱか)りとは関係なく、父の国籍が私の心に翳を落とさなかったのは、小屋のような破れ板囲いの炊事場に立つ父の姿や、小学校児童である姉、私、弟の三人の子供の運動会当日、朝暗いうちから起き出しておにぎりや卵焼きやコブ巻きなどを作り、早々と莫蓙を小腋に学校にやってきて、運動場の外周の家族席をいち早く確保したり、修了式や卒業式には講堂を埋めている父母たちのうしろにひっそりと立っていた父の姿が、少年の私の脳裏に灼きついていたせいであろうか。

海兵からの電報が私にだけ来なかった夜、父は普段とちがって火鉢の銅壺(どうこ)に燗瓶をつけず、私と眼が合わないようにして黙々と食事をしていた。息子に済まなさそうな姿だった。部屋の隅に年中敷いてある寝床から、高等商船学校の試験がまだありますからね、と母が父にとも私にともなく言った。姉も弟も、黙って箸を運んでいた。高等商船学校を卒業すれば、将兵や物資を南方に送る輸送船に乗り込んで、お国のために尽くすことができるのだった。

海兵入試の少しあとに行われた陸士入試にも私は受験していたが、台風のため汽車が不通にな

って、大分市の受験場までの約七十キロを線路伝いに歩いて行ったため、市内に到着したのは試験第一日目が終った真夜中だった。特別事情ということで二日目からの受験が一応許されたが、合格圏内にはいれるはずはなかった。海兵と同じ十一月三日の発表日から遅れて合格電報が舞い込んだのは、陸士と海兵の両校に合格した者の中で、海兵を選んだ者が多く、それで私にも合格のお鉢が廻ってきたのかもしれない。

電報が届いたのは、昼時分だった。これで戸籍の件は終った、と私は電文を読みながら思った。高等商船学校受験のための勉強をしながら、何かに対するうとましい気持ちがあった。遣り場のない憤りのようなものもあった。

いつのまにか父は仕事場から姿を消していたが、夕方時分帰ってきたとき、酒屋でコップ酒でも飲んできたのか、それとも父の国籍を知っている同業者の家にでも上がりこんできたのか、眼のふちが赤かった。

陸士に向かって故郷を発つ日、教師や同級生だけでなく、近所の人たちまで日の丸の小旗を手にして駅の小広場に来た。上り框まで這って出てきた母は、しっかりがんばってくださいね、と言って涙ぐんだ。新調の国民服を着た父は、小広場で出陣の挨拶を述べる私の横に、落ち着かないふうに立っていた。人前に出ることをいやがる父であった。万歳が三唱されると、自分も手を挙げるべきかどうかと、もぞもぞしている父の姿が眼はしに映った。その万歳が自分に対してなされたように、他の大人たちと同じように丸坊主になっている頭を、何度も下げるのだった。

陸士に入校した私は、午前中の学科にも午後の術科にも、極めて真面目であった。朝鮮人でありながら日本人になりきろうとし、陸士合格をあのように喜んだ父を想い、私は励んだ。

私が陸士在学の経歴を他人に知られたくないのは、戦争に敗けたために、将校を養成するその

学校に在籍していたことを愧じているからではない。陸士での生活を思い出したくないものがあるのだ。高等学校時代、寮で私を陥れた不快感も、ひとえにそれに由来していた。

入校して日が経つうちに、私は陸士に失望しはじめていた。英語の課業を廃止していることも、その一つだった。五千人近い生徒たちに課せられた外国語は、支那語である。百五十名そこそこの生徒だけが、特別班として英語を習うのである。戦う相手は、支那よりも英語使用国である米英に移っているのではないだろうかと、私は訝かる。英語こそ、我々将校生徒はマスターしなくてはならないのではないだろうか。敵国語を知らなくては、戦争はできないはずだ。入学試験の際、海兵には英語の課目があったが、陸士には無かった。そのときにも私は不審な気持ちを抱いたのだったが、日常生活においても英語を敵性語としてタブー視している陸士教育に、私は疑問を抱いた。

このような失望を私は至るところに覚えた。外出は月一回程度あったが、外出用の正装に長靴を穿き、白い手套をはめて舎前に整列している生徒を前にして、週番士官の勤務に就いている区隊長が壇上から、女は長髪賊である、たとえ母親であれ姉妹であれ、一緒にでれでれと街を歩いてはならぬ、と申し渡したとき、直立不動の姿勢をとっている私は戸惑った。区隊長たちの年齢は、陸軍大尉とはいうものの二十六歳前後の青年にすぎないが、私たち生徒にとって彼等は教師であった。絶対者ですらあった。私の戸惑いは、苦々しいものに変わった。

胸の一隅に兆しはじめた陸士に対する失望は、不信感にまでなった。それは各行事に対しても向けられた。同期生会や中隊会が催されるつど、団結と切磋琢磨が訓示され、全生徒は大声で誓いの言葉を斉唱した。解散したあと、白々しい気持ちになるのだったが、その気持ちを振り払っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com